

---

# 神造世界のルーチェ

しょぼん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神造世界のルーチン

### 【Zコード】

Z9987W

### 【作者名】

しょほん

### 【あらすじ】

事故にあつた少女は異世界に転生した。そこは魔術があり、迷宮のあるファンタジーな世界。ある日、幸運に恵まれ魔術書を手に入れた少女は、独学で魔術師への道を歩んでいく。

例え、進む先に何があるうとも。

【二週目プレイは難易度UPがお約束  
ファンタジー！】

少女の割と泥臭い異世界

人生どう転がるかなんて、きっと誰にも分からぬ。

一年後、一週間後、もしかしたら一秒後には死ぬかもしれない。それはとても怖いことで、多くの人を挫けさせる難問だろう。だけど。

それでも、私は生きていく。命の続く限り、生きていく。今生きているというこの奇跡を、絶対に失わない為に。

ティアロストという村がある。聖炎王国ヴァルフレアの首都遠くにある、主要な街道からも外れた40世帯程しかない、小さな、いや極少規模の村だ。正直、村と呼んでいいのかも疑問だが、少なくともそこに住む人たちが名を付け村と呼んでいるのだから、村なんだろう。

とにもかくにも、ルーチェは12年前にこの村で生を受け、それからずっとこの辺鄙な村で生きてきた。一度も村を出ることもなく、ずつとだ。

旅行に出れるような資産家ではなく、加えてルーチェは母親であるクレアとの一人暮しだったから、寂れた街道を歩いて半日近くかかる隣村のデイルゾンまで、幼いルーチェが向かうことなど許されなかつた。

まあ、それも納得できる。この世界には危険が多いのだから。

「混沌の日」という物がある。数年、もしくは数十年に一度、この世界のあちこちにある魔界の入り口「カズム」から、急激にその数を膨れ上げた魔物の群れが地上に進軍するという、恐ろしい現象だ。

それによつて現れた魔物は大概の場合、各国が全力を挙げて打ち滅ぼすのだが、何しろ膨大な数の魔物だ。討ち漏らしという物は当然出てくる。戦線から逃げ延び、あるいは突き進んで人々に害を為

す存在が。

6年前の混沌の日。ルーチェの父親もそれで死んだ。この村に現れた一匹の魔物を倒す為だつた。

いや、父親だけじゃない。他にも3人の男手がこの時に亡くなり、彼らは死後この村の英雄になつた。とは言つても、その恩恵など遺族への人当たりが良くなつたという、ただそれだけの物だつたのだが。

全く、酷い話だ。

ルーチェの家は他と違ひ大きめで、二階があつて宿屋を営んでいる。主にディルゾンの村に泊まれなくなつた人を客層にしているのだが、そのお陰でギリギリながらも生活はしていける。服だつて一年に何度も買つてはいるし、たまには甘いものだつて食べられる。

しかし他の家はとくに、男手を失くした事で生活はギリギリ所かボロボロだ。村の住民も罪悪感があるのか、たまに食糧の差し入れ位は各自しているようだが、金銭援助はされていない筈だ。その所為で彼らは清貧を通り越した生活をしている。本当に酷い話だ。とにかく、話が脱線したが、世界は物騒なのだ。魔物の生き残りがいるかもしぬないし、盗賊だつて現れる。そんな世界から守られるように、ルーチェはクレアに大事にされてきた。

「愛情を持つて、のどかな村で健やかに。小さいけれど幸せな生活がここにはある。それってとっても幸せな事なのよ?」

実際にそのような事を口にした事もあつたし、クレアの生き方はそんな言葉を体言しているかのようだ。

「けど、そんな生活は退屈すぎるよ

早朝。宿屋の自室でベッドに横になりながら、呟く。ルーチェは常々そう思つていた。

「のどかな暮らしとか、素晴らしいよね」とルーチェも思う。でもそれは「都会で疲れた生活を自然で癒して貰いましょう」的なまの娯楽だから良いんであって、一生涯を其処で生きて生けるかと言つたら、ルーチェには無理だ。

飽きが来る。というか、ルーチェは既にこの生活に飽きていた。ルーチェだつて「こんな事を思つるのは薄情かな」とか思つてゐる。思つてゐるけど、無理。無理だ。

（いい加減無理。だつてまだ若いし、お年寄りじゃないし、第二の人生華々しくとは言わないけれど、もうちょっと文明レベルの高い所に生まれたかったし！）

「……初めから、何もしらなければ良かつたのかな」

そうすれば、この村で暮らす事に何の躊躇いも疑問も抱かないで、この村の誰かと結婚して、お母さんに、お婆ちゃんになって幸せに死ねたのかもしれない。

でも、知つているんだからしようがない。そんものは生産性の欠片もない、言つても仕方がない事だ。

「事故で転生した先は、ファンタジー世界の田舎村でした、かあ」

天井を眺めながら、何かを掴むかの用に手を伸ばして呟く。

そう、ルーチェは普通の村娘ではなかつた。前世の記憶を持つていた。

ルーチェの前世はヴァルフレアなんて存在しない、こことは違う世界の小さな島国だつた。その国は資源こそなけれど、その技術力で先進国と認められる高度な文明を持つた国だつた。

様々な学問が充実していく、義務としての教育が受けられた。物

理法則を解き明かしたお陰で、この村からすればまるで、魔法のような事が当たり前に出来る道具がありふれていた。

ルーチェ自身も、昔の記憶に曖昧な所も多いが、進学校と呼ばれる一般よりも、より難しい教育を施される学校に通っていた。それが前世のルーチェの自慢でもあった。自分は特別だと少し思つたりもしていた。

けどそんな事は今、何の役にも立たない。

数学が出来たって、歴史の年号を覚えていたって、各種文法をすらすらと答えられたって、それがこの田舎生活で何の役に立つというのだ。所詮専門的なレベルまで受けていない私の知識は、しょせん日常生活の無駄知識。その枠を出れないのだから。

「本当、後悔つて後になつてから悔いるんだよね。私もせめて、工業高校にいつてたら何か変わつてたのかも」

前世の自分なら絶対にしない選択を呟く。ルーチェはくすりと笑つた。

(さてと、そろそろ仕事をしないとね)

ルーチェは仕度を整えると外に向かつた。先ずは今日使う水を井戸から汲んでこないといけない。季節はもうじき秋になる。過ごしやすい気候だ。

ルーチェは自分と同じ位の大きさの荷車を引いて、村の中央にある井戸を向かつた。途中、何度か村の住人とありきたりな会話をして通り着く。この村には井戸が一つしかなかつた。その為、村人は皆ここに水を汲みにくる。

どこの家庭も沸騰させてから使うだろうが、そのまま飲んでも案外大丈夫かもしれない。水質は良いようだ。それには村人全員の協力の結果という面もあるだろう。

普段は蓋がしてあって、枯葉や虫が入らないように気をつけている。けどその為に、蓋をし忘れたり、井戸水を汚すようなことをした場合は大変だ。

ずっと前、子供がここにおしつこをした時には、その両親が村中の人間に頭を下げる回つた。彼らは殊勝な態度で頭を下げ続けたが、何度も怒鳴られて胸倉をつかまれた謝罪訪問だつたという。勿論ルーチェは少し可哀想に思つたので、彼らが自分の家に謝りにきた時、謝罪を受けるクレアの横で微笑みながら、内心で「死ね」と思うに留めておいた。大人の対応だ。

少し話しがずれた。とにかく、水は大事だということだ。そして、曲がりなりにも宿屋を営んでいるルーチェの家の場合、必要な水も多くなる。

ルーチェは一回に分けて木樽に汲んだ水を家に持ち帰ると、宿屋中の掃除を始めた。全てが終わると昼ごろになつていて、簡単な昼食をとる。硬いパンと卵焼きだ。塩は余りかかっていない。節約の為だつた。クレアと話をしながら取る昼食の時間はすぐに終わつた。

「じゃあ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。夕暮れまでには帰るのよ？」

「分かつてゐるつてば」

お決まりの文句だ。ルーチェは家を出た。ルーチェの仕事は掃除まで終わり。後は自由時間だつた。

この時間、他の暇な娘たちはお喋りをしたり、村長の家で受ける事の出来る裁縫仕事などをしたりするのだが、ルーチェは散歩がらに野草などを取つて帰る事が多かつた。

頭の出来は割といいと自覚しているルーチェは、教えられた野草を見つける事は得意だ。だが手先の器用さには余り恵まれなかつた

ようで、凝り性にも拘らず出来が遅く見栄えの悪い物しか作れなかつたのだ。

腰帯にナイフを差し皮袋を持つて、獸道を歩きながらルーチェは自嘲する。

(「なんだから「女の子らしくない」とか言われかけつんだよね。姿もお父さん似だから、不細工ではないと思うけど、地味だし。お母さんに似れば良かつたなあ。お母さんは綺麗な金髪だし。胸も大きいし）

歩きながら、ルーチェは自分の胸に手をやつた。ふくらみのない胸だ。成長期だとうのに、成長する気配がない。

髪の長さも肩まで揃えている所為で、たまに外から来た人からは少年と間違えられることがある位だ。

「あーあ、嫌になっちゃうなあ」

何か面白い事でもないかな。咳きながらルーチェは道を進む。そうして日が暮れ始めたのに気づいて帰宅した。

帰宅すると、宿泊客がいる事をクレアが告げた。珍しい、月に1～2回の出来事だ。

宿泊客は2人だとう。クレアに頼まれたルーチェは、更なる水を求める戸に向かった。お客さんがきた時は、宿屋自慢の簡易シャワーが派手に使われる為に水の消費量がぐんと上がるのだ。ちなみに他の家に簡易といえどシャワーなど存在しない。濡らしたタオルか水浴びで済ませるのが一般的だ。

ルーチェはまた一回に分けて、荷車で水を運ぶ。重労働だ。これは後で大好物のココアを請求してもいいんじゃないか。そんなことを考えながらルーチェは働いた。

食事の準備や宿屋の主人としての仕事はクレアがこなすので、ルーチェの仕事は裏方となる。クレアとしては娘がお客様に粗相をしてしまう可能性よりも、頭の悪い客が娘に手を出す可能性を危惧しているらしく。

（それなないと思うんだけどな。もつけようと成長した後ならともかく、今のこの少年体型じゃ魅力もへつたくれもないような気がするし。ああ、ロリコンっていう可能性もあるのか。いや、この場合はショタコン？）

くだらない事を考えながらもルーチェは追加の仕事を無事終わらせた。途中、食事を取りるために降りてきた宿泊客とすれ違った。丁寧に礼をして自室に戻る。宿泊客も日礼をして台所に向かった。

宿泊客は二人組みだった。鈍い銀髪の壮年の男性と、黒髪のまだ少年と言つてもいい容姿の若者だ。親しげでありながら妙な距離感を持つているように感じさせた彼らは、一泊すると翌日の早朝には旅立つていった。

ルーチェは見送りにだけ顔を出すと、いつものように仕事に取り掛かる。水を汲み、掃除を始める。そこで気づいた。

宿泊客のいた部屋。その壁とベッドの隙間に何かが落ちていた。

腕を伸ばし、それを掴み取る。そこには、一冊の魔道書だった。それも、初心者用の教本だ。

「……嘘でしょ？」

この世界はファンタジーだ。魔界がある。魔物がいる。そして、何よりも「魔術」がある。この世界の魔術というのは御伽噺の中の物ではなく、きちんと確立した技術として存在している。

そう、誰にでも使える「技術」としてだ。

とはい、その教育には酷く時間と金がかかると言われている。

その為、魔術師になるのは民衆を守る義務のある貴族や、一部の金持ち、世捨て人位だ。だから学ぶ機会もお金もなく、クレアを見捨てて村を出る気もないルーチェに、そんな機会は存在しなかつた。だが、そこに憧れがなかつたと言えば嘘になる。いや。嘘になるどころか、大嘘だ。

（憧れていた、憧れていたとも！）

ルーチェは思わず飛び跳ねた。

（だつて前世の世界でもあり得ない秘術だつた存在が、この世界では現実の物なんだから。そりやあ使つてみたいと思つていたよ。でも諦めてたんだ。それなのに、それなのに…）

「『千載一遇のチャンス』つて、こいつの事をいつのかも」

ルーチェは呟くと、魔道書を流し読みする。そこには様々な直筆の書き込みがしてあつた。

それを読んでルーチェは推測する。

（これは多分、取りに戻るなあ）

魔道書自体は、それなりの本屋なら売つてゐる。とんでもなく高い専門書だが、成人男性の月給の半分はいかないだろう。10万ギルドといつた所か。ただ、こんな田舎村には本屋などない。デイルゾンの村にも多分ないだろう。そしてこれだけ使い込んでいるのだ。新しい本を買つて終わり、というのも多分ない。彼らはきっとこの本を取りに来る。

ネコババするというのは論外だ。クレアが槍玉に上がるし、今思えば彼らは魔術師の師弟だったのだ。権力も持つてゐるかもしれない

いし、魔術だなんて超常の力を振るわれたら、たまらない。

「 よし」

結論は、出た。

ルーチェは他の部屋の掃除を後回しにすると、自室に戻り大慌てで机に向かった。そして引き出しの中からわら半紙とインク。羽ペンを取り出すと大急ぎで写本を開始する。

大事なことや回りくどい表現は簡略化しつつ、ルーチェは満足に勉強も出来なかつた今までの鬱憤を晴らすかのように、異常な速度で写本を薦めていく。腱鞘炎を起こすのではないかと思つぐらい手が疲れて痙攣しあじめたが、それでもルーチェは作業を止めなかつた。

写本が3分の2は進んだ所だつた。部屋の扉が叩かれた。

クレアだ。扉越しに声を掛けられる。

「ルーチェ、いる？ 何だかお密さんが忘れ物をしたみたいなんだけど、貴女知らないかしら？」

「……ああ、そういうえば本を見つけたよ。今持つていくな

「全くもう。そういう事はお母さんにすぐ言わないと、駄目じゃない。……お密さん、急いでいるみたいだから早くね？」

「」めんなさい

クレアはルーチェの部屋に勝手に入ろうとしない。そのお陰で娘が何をしているのかに気づかなかつた。

ルーチェは名残惜しかつたが魔道書を閉じると、ドアを開けてクレアに素直にそれを渡した。本当は自分の物にしてしまいたかつた。

だけどそれは無理な話だ。

ルーチェは疲労によつて震える手を隠しつつ、クレアの後を付いていき添え物のように微笑んで、彼らを見送る。壯年の男性が微笑み、ルーチェを見つめた。

「見つけてくれてありがとう。可愛らしいお嬢さん」

「いっ、いえ。そんなことは」

褒められた。少し照れる。

（だつて「可愛らしいお嬢さん」とか、殆ど言われたことないもの。そりや照れるぞ。年上の男性というのも、素敵かもしけないな。……まあ「実は写本をさせて貰いました」何て言つたらどんな顔するか分からぬいけど）

それでも、殺されるような事じゃないだろつ。ルーチェは微妙な笑顔で彼らを見送つた。

やがて彼らの姿が見えなくなると、一人して家に入り夕食を食べる。疲れきった表情をしていたので、クレアに心配された。

そうして早々に就寝の準備を済ませると、クレアに「おやすみ」と告げる。そして自室に戻つた。

疲れた。ただ、同時に奇妙な高揚感に包まれていた。今日はもう何も出来る気がしないが、明日からが楽しみだ。写す事に専念していたので、魔道書の内容は殆ど頭に入つていない。

布団の中でルーチェは、くすくすと笑つた。何かが変わるようにそんな予感がしていた。

魔道書の写本を作つてから、ルーチェの生活は確かに変わつた。仕事をこなす事に変わりは無かつたが、散歩、兼野草採集の時間が殆ど無くなつて、魔術の勉強の時間に当てられることになつた。外にいる時間が少なくなつた。それでも勉強は楽しくて、ルーチェは今までよりも楽しい日々を過ごすようになった。途中までは、そう、途中まで。途中までは良かつたのだ。けど途中から問題が生じた。

座学はルーチェにとって何の障害も無く進んだ。魔道書の内容はよく出来ていて、簡単な書き方をしているにも拘らず、この世界の仕組みや人間の可能性、魔界に対する考察など、とても魅力的な題材が飽きの来ないように、上手くまとめられていた。

例えば、この世界は「物理世界層」と「精神世界層」の二つからなる「多重積層構造」になつていて、物理世界層は「マテリアルレイヤー」。精神世界層は「アストラルレイヤー」と呼ばれているだとか。

例えば、人間が魔術を使えるのは「コア」と呼ばれる、魂に該当する器官から魔力を引き出す事が出来るからだ、とか。

とても興味深い事実だった。もつと知りたいと思った。だからルーチェは写本の内容を三ヶ月もしない内にほぼ理解しきつたし、次の段階の訓練へと進んだ。

でも、そこからがきつかった。

それは「自覚訓練」と呼ばれるものだ。自分の中のコアの存在を自覚する、魔術師になる為の第一歩となる訓練。ルーチェはそこで躓いた。

（だって、訳が分からぬ。魔道書を読んでも「特殊な『魔具』」を利用した開眼が一般的な方法である。稀に瞑想や先天的に自覚す

る者も存在する」だなんて、事しか書いていない。」なんなんじゃ出来る訳ないじゃないの）

特殊な魔具。魔具とは噂に聞く、魔法の道具のことだ。魔物を倒した時に稀に残る「コアクリスタル」という物を動力源にした凄い物らしい。とにかく、そんな田舎に存在する訳がない物を利用するものが普通だとか言われても困るし。残念ながら先天的に自覚などしていないルーチェとしては、ここは原始的？に瞑想でいくしかない。

けど無理だ。集中力には自信がある方とはいえ、年頃の娘に瞑想の経験がある筈ない。何なら道行く女の子を捕まえて「貴女は瞑想経験がありますか？」なんて質問してみればいいのだ。絶対に「NO」と返事が返る筈だから。

ルーチェは半ば自棄になつて訓練を続けた。けれど、いつまで経つても自覚訓練は進まなかつた。

始の一ヶ月はまだ良かつた。二ヶ月もまだ耐えられた。三ヶ月はもう無理だつた。目に見えてルーチェは苛つき始めた。四ヶ月になると苛つきは逆に収まつて、今度は自分には才能がないんじゃないかと自信を失いかけた。その途中の12月、ルーチェの13歳になる誕生日さえも、つまらなく過ぎていつた。

そんな時だつた。就寝前にルーチェは、クレアに呼び出された。食卓に座るよつと促される。

「ルーチェ、ちょっと話があるの。」  
「座つて？」

「うん。いいけど、どうしたの？」  
「飯の時に言えよかつたの」

「それでも良かつたんだけど、何だか言つ時期を逃しちやつて。  
はい、どうぞ」

「わー、やつたあ！」

温かなココアがコップに注がれて、ルーチェに渡された。高価な為に滅多に飲めないココアは、ルーチェの大好物だ。

クレアは自分の位置にホットミルクを置くと、椅子に座り溜め息を吐いた。そして、美味しそうにココアを飲むルーチェを見て微笑みながら、自分もミルクを一口飲む。

「最近ルーチェ、何だか凄く疲れてるわよね。勉強のし過ぎなんじゃないかしら？」

「……そんなことないよ。全然、寧ろ足りないくらいで」

「お母さんはいつも思わないなあ」

「……何で？」

「だってルーチェは、頑張りやさんだもの」

不満そうな声を出すルーチェに、クレアは両手でミルクを飲んで、くすくすと笑った。

「ルーチェは何時だつてそういうもの。要領が良いように見えて、自分で決める目標がとても厳しいの。だから一回決めたら絶対にそれを遂げようとするのよね。家の仕事だつて、お母さんが頼む前から自分で『ここまではやらなくちゃ』って決めて、少し大変でも絶対にそつじようとするじゃない。覚えてるわよ。ルーチェがまだ8歳のとき、マーテルおばさんのとこの娘さんが何度も遊びに誘つても、午前中は絶対に遊びに出かけなかつたじゃない。『まだやる

』ことがあるからって』。『ううん』ればあれからあの子、ルーチェのことを誘わなくなつたなあ』

「うん

「寂しいわねえ」と呟くクレアに、ルーチェは何も言えなかつた。クレアの優しさと愛情が、ココアの湯氣と共にとても伝わつてきて、胸が一杯になつた。

「お母さん心配しちやつたの。貴女は自分の事は自分でする子だし、言いたいことは大体言つてくれるから、お母さん凄く助かつて。私達の娘はこんなに賢くて、こんなに素敵に育つてて、お母さん毎晩寝る前にお父さんに伝えてるのみのよ?」

「……うん

「だけどね、同時にすつゝ寂しいの。ルーチェがお母さんに甘えてくれないのがすつゝ寂しいの。だから、ね」

「うん

「何か辛いことがあつたり、悲しいことがあつた時。どうしても上手くいかない時。そんな時はお母さんに話してみて? もしかしたらもう、ルーチェの方が頭がいいかもしない。だけど私はお母さんだから、ルーチェの楽しい気持ちだけじゃなくて、辛い気持ちも受け止めてあげたいの」

「……ん、ありがと」

ルーチェは俯いた。涙が出ていた。初めてといつて良いかもしだ

ない。嬉しくて出た涙だった。

クレアは立ち上がりルーチェの頭を撫でると「毎回は無理だけど、またココアを作つてあげるわね」と言つて部屋を出て行つた。ルーチェはもうしばらく食卓についていた。ココアが少し冷めたが、それでもとても優しい味がした。

それからというもの、ルーチェは大分落ち着いた。相変わらず訓練は進んでないが、それでも心にゆとりができていた。

水汲みや散歩で外に出かける時、村の人にはうと「大人っぽくなつたね」と言われるようになつた。少し嬉しく感じて「そんな自分はまだまだ子供だなあ」と、ルーチェは思う。

相変わらずこの村は小さくて、この辺りでルーチェの知らない「場所」はきつともうないだろう。でも、ルーチェの知らない「事」はきつとたくさんある。

「だつたら、こんな生活も悪くはないんじやないかな」

ルーチェは自然とそう思えるようになつていた。そうなると、人間というのは不思議なものだ。肩の力が抜けたからか、理由はよく分からぬが、少しづつ訓練が上手く行くようになつてきた。

そうして年が明けて、訓練開始から5ヶ月余りが過ぎた日。ルーチェは初めて自分のコアを自覚した。大喜びだ。

その日の夜。ルーチェは夕食の時間にクレアに向かつて微笑むと、告げた。

「お母さん、私、出来ちゃつた

「……えつ。なつ、何が出来たの?」

「魔術の初步、ずっと訓練してたの。……遂に出来ちゃつたのつ

！」

「ああ、魔術ね。……魔術？」

クレアは慌てた表情を見せ、続く言葉でほつとした表情を見せる。そして何かを悩むかのような表情へと、めまぐるしくその顔を変化させた。

「うん、そうだけど、どうかしたの？」

ルーチェはそんなクレアの様子をいぶかしみ声を掛ける。だがクレアは「何でもないわ」と言い、少し困ったような微笑みを見せたあとにココアを作ってくれた。

とても暖かくて、甘いココアだった。

それからもルーチェは、村での生活を前より楽しく過ごしながら、次々と訓練課程を進めていった。

魔道書を落とした寄。彼らが訪れてからもつすべ一年が経つ。最近では自覚訓練が殆ど完璧といえるレベルになり、自身のコアの隅々まで把握したルーチェは、その付属器官である「ゲート」の訓練に精を出していた。ゲートというのはコアの一部分であり、混沌と呼ばれる異界に繋がる扉もある。魔術師はここから魔力や存在を引き出す事によつて、魔術を行使するのだ。

またこの段階になると「パス」と呼ばれる「精神接続能力」の訓練も同時進行する。これが以上に難しかつた。既に実践の領域だといえるからだ。ルーチェの訓練生活はまたしばらく滞つた。

けれどたまにクレアに愚痴を溢したり、村外れの森で見つけたお気に入りの広間で昼寝をしたり、そんな事で息抜きをしながらルーチェはゆっくりと、着実に訓練を重ねていった。

今日も静かな食卓で一人。ルーチェはスープを詰まらなそうに口に運ぶと呟く。

「お母さん、私って才能ないのかなあ」

「ルーチェに才能がなかつたら、お母さんなんてきっとみそつかすよ」

よく愚痴を溢すようになつたルーチェに、クレアはからからと笑つてそう言った。

そんな風に笑えるクレアの方が凄いんじやないかと、ルーチェは歳の割に美人なクレアを見て「お父さんは幸せ者だつたんだなあ」と思う。

他愛無い日常がそこにあつた。

季節が巡つて、また冬になる。12月はルーチェの誕生日だつた。これでルーチェも14歳。婚約が許される年になる。この地方では14歳で婚約が許され、16歳で結婚する者も多かつた。

ルーチェにはそんな気も相手も居やしないが、ようやく大人の仲間入りという物だらう。母は誕生日祝いに、ハチミツのたつぷりと掛けつたバターケーキを焼いてくれた。

「それじゃあ火をつけるわよ?」

「あつ、ちょっと待つて」

ルーチェは覚えたての「魔術」で世界を構成する精霊の一つ「火靈」にバスを結ぶと、ケーキに立てられた蝋燭に小さな火をつけた。目を丸くして驚いているクレアを見てくすくすと笑つて、そんなルーチェを見てクレアが笑つた。一人揃つて訳もなく大笑いをした。

笑いが収まつた所で、ようやくお待ちかねの食事の時間となつた。これが、ほつぺたが落ちるかと思う位美味しい。ルーチェは何度もクレアの腕前を褒め称えた。

その日の夜、ルーチェはクレアの部屋で一緒に眠つた。いつからか、ルーチェは一人で眠るのが当たり前になつていた。いや、自分でそう決めたのだ。

けれど、こうして誰かの体温を感じて眠るところは、とても幸せな事ではないだろうか？

「偶には、一人で寝るのもいいね」

「お母さんはいつも歓迎よ」

「んー、偶には、ね」

「ふふふ」

ルーチェは照れて壁のほうを向いて眠つた。髪をクレアに撫でられる。優しい手つきだった。

（いつか私も、こんな風に優しく誰かの頭を撫でるのかな）

いつのまにかルーチェは眠りに落ちた。その日は夢を見なかつた。夜が去つたのが残念な位、清清しい朝だつた。

そんな風に、慎ましくも平穏な生活が続いた。クレアとルーチェの二人暮し。穏やかに進む村の時間。

けれど、それが贅沢な物だと思い知らされる時が来るなんて。

五月の静かな夜。特別な事なんて何もない、何時も通りの日だつた。ルーチェはいつも通りにクレアに「おやすみ」を告げ、ベッドに横に入る。それだけだつた。

今日という一日はそれで終わりになる筈だと、ルーチェは無意識に思い込んでいたのだ。

大きな間違いだつた。

深夜に突然布団を剥がされたルーチェは、腹部に感じた衝撃で目を覚ました。

「……う、ぐつ

「黙れ、殺すぞ」

衝撃はすぐさま痛みに変わつた。続いて襲つてきたのは恐怖だ。何せ人相の悪い男がルーチェを見下ろしていて、ナイフを首に突きつけて物騒な発言を囁ましてくれたからだ。

（何、一体何が。どういうこと？　何で私の家にこんな奴が。ひょっとして……どうぼう？）

男は、痛みと混乱する思考の所為で身動きの取れないルーチェにのしかかると、ロープで両腕を後手に縛り上げ、猿轡を囁ませた。手馴れている。とんでもない早業だつた。

「よし、いいか。死にたくない事を聞け。刃向かつたら殺す。手間を取らせても殺す。いいな、理解できるな？」

ナイフで頬をペチペチと叩かれて、ルーチェはベッドの上で小刻みに顔を上下に動かし、了承の意思を伝えた。男は妙に座った目でこちらを見つめているが、ルーチェの様子に満足したのだろう。ルーチェは後ろ髪を犬のリードのように掴まれ立ち上がらされると、男に促され震えながら足を進ませた。

何が起きているのか、誰かに教えて欲しかった。

（一体何が、いや何がって、泥棒が来たんだろうけど。そうだ、母さん。母さんは無事なの？ 村の人も、どうしよう。私どうすればいいの？）

ルーチェの思考が再び混乱しかける。戦うべきか、一瞬そもそも考えた。だがこの状況で動くのは危険だ。ルーチェは冷静さを取り戻した。少なくとも、クレアの無事を確認しなければならない。

部屋のドアは開きっぱなしだったので、ルーチェはそのまま進んだ。玄関前になるとそこにはもう一人の男がいた。爬虫類の様な顔の男だった。クレアもそこにいた。

ぐつたりとしていて、ルーチェと同じように拘束されていた。手を前で縛られている。顔面には殴られたような後があつた。ルーチェもまた髪から手を離される代わりに蹴りを入れられ、同じように地面に倒れこんだ。ルーチェの視線に怒りが宿る。しかし、男達はそれには気が付かない。

彼らはまるで、単純作業を終えただけのような気楽さで会話を始めた。

「おい、上にはこいつ一人だつたぜ」

「「」「苦労さん、こいつちは女一人だ」

「女が、こいつの母親か。他に家族はいないのか、父親は？」

「いないそうだ。猿轡かませる前に聞きだしたが、死んでるつてよ。上の部屋も見たが、他には誰もいねえよ」

「ならしい。この家はこれで終わりだな」

「合流してこいつら、押し込むぞ」

随分ふざけた会話だった。人の家に押し入つておきながら、よくも。ふざけるなよ。

ルーチェの怒りは静かに高まりきつっていた。  
こいつ等は手馴れている。多分、もう何度も繰り返してきた作業なんだろう。自分達を強者だと思いこんでいるのだろう。だが、それは大きな勘違いだ。

（あんた達より、私の方が強い）

猿轡の所為で声は出せない、けれど構わなかつた。心中で宣言して、ルーチェは意識を集中した。選択するのは精霊魔術。  
特殊法則支配層に存在する「火靈」に精神を繋ぐと、一瞬にして精霊の意思を掌握し、ゲートから引き出した「魔力」というエネルギーを注ぎ込むことで、その存在を凝縮し強化する。  
瞬く間に炎がルーチェの目の前に現れ、収束し、玄関前を照らしだす。

（絶対、逃がさない）

ルーチェは不自由な状態から立ち上がった。覚悟は決めていた。こいつ等は絶対に逃がさない。少なくとも半殺しにはする。多分さつきの会話からしても、こいつ等にはもっと仲間がいる。少数の泥棒じゃない。夜盗だ。

逃がしたら、まずい。

ルーチェは火球を入り口扉から10cmも離れていない場所へと浮かばせた。突然の出来事に夜盗達が慌てふためく姿が瞳に映つた。しかし火の精霊に精神を接続し、その荒ぶる心に多少なりとも影響されている今のルーチェにとって、彼らの姿は害虫にしか見えない。すなわち、容赦する必要性を感じない。

ルーチェは呟いた。声は上手く出せなかつたが、精霊魔術の行使に発声はいらない。ルーチェと精霊を繋ぐパスはもう結ばれているのだから。

「びいぶえ（死ね）」

無慈悲な呟きと共に、夜盗達の絶叫が響いた。火球が一層激しく燃え上がり大きくなると、分裂して夜盗達の足を燃やしたのだ。醜い悲鳴が響いた。それを聞いて、ルーチェは決断を下す。

ルーチェに男達を殺すつもりはない。だが彼らの悲鳴は余りにも煩かった。その悲鳴は誘蛾灯になる可能性がある。それはあつてはならない事だ。

ルーチェは更に火霊を操ると、夜盗達の喉を焼いた。

残酷な事をしている自覚はあつた。だが、必要な処置だとも思つていた。そうして彼らが余り身動きをしなくなると、ルーチェは呆然と此方を眺めていたクレアを一瞥した。

（やめてよ母さん。私をそんな目で見ないでよ。他にどうしようも無かつたじゃない）

ルーチェは精靈との接続を薄くする。思考が平時の物へと戻つてくる。クレアの目に強張りを見つけて、それが自分を責める視線に感じて、ルーチェは悲しい気分になつた。だけど。

だけど、後悔なら後ですればいい。今ルーチェはするべき事をするべきだ。

大好きな人を守る為にも。

ルーチェはロープに縛られた状態で母を立ち上がらせると、首を使つて「ついてきて」という意思を伝えた。何度も繰り返すとクレアはその意思を汲み取つて、ルーチェの後に続いた。

ルーチェがクレアを連れて台所に辿りつく。そのまま火靈を使い小さな明りを生み出すと、戸棚から後手で包丁を取り出した。包丁の置き場が高くないのが幸いした。刃が指に当つて冷やりとしたが、何とか持つことに成功し、それを床に降ろすと、クレアもよつやくルーチェの意思を理解したようだつた。

前で両腕を縛られているクレアは、後出でしつかりと両腕を拘束されたルーチェよりも自由が利く。包丁を持つ事が出来るのだ。包丁がクレアの手に渡る。それから数分後、ルーチェの腕の拘束はクレアの包丁によつて切られた。ルーチェはそれを確認すると自由になつた手で猿轡を外し、今度はその手でクレアの拘束を解いていく。

「……ふう。これで、よつやく逃げるね。母さん、行こう

「待つて、ルーチェ。待つて。……私は母親として、謝らな  
いといけないわ」

ようやく一人とも拘束が解けると、ルーチェは俯くクレアに手を差し出した。しかし返ってきたのは握り返す手ではなく、謝罪だ。どうして、なんでこのタイミングで？

(もしかして、もう、私と居たくない、とか？)

怖かつた。ようやく人心地がついたこの時だからこそ、ルーチェの怯えは高まっていた。ルーチェの感じた怯え。それは「拒絶される恐怖」だ。

先ほどまでの、人を人とも思わないような思考は、もう出来なかつた。ある種の勇ましい思考は、既に空の彼方に消えている。ルーチェは自分をクレアに「そんな人間」だと、思われたくなかつた。ルーチェは怯えながら、クレアの言葉の続きを待つた。

「『めんなさい、ルーチェ』

「どう、どうしたの、母さん。今は急がないと、ね？ 話は後で聞くから」

「いえ、後では駄目だわ。私は、私は自分の娘に何て事を……」

「……母さん？」

ルーチェの身体から、自然と力が抜けた。クレアは泣いていた。それでいて震えながら、優しい手でルーチェの事を抱きしめる。

「私が、私が守つてあげなきゃいけなかつたのにっ！ あんなこと、あんなことをさせてしまつなんて！」

「……いいんだよ、母さん。私は大丈夫。大丈夫だか

「 大丈夫な訳ないじゃない！」

クレアはルーチェの言葉を遮ると、抱きしめる力を強くし、目を腫らしながら大きな声で怒鳴った。

「人を殺して、それがあんな屑でも、貴女の心が痛まない訳がないでしょ！ 強がって、無理して、ばかよ。ほんとにばか。……何で、何でそんなに優しい子に育つたの！」

「……母さん、私は大丈夫」

「またつ、大丈夫な訳つ」

「お母さんがそう言つてくれるから、大丈夫なの」

ルーチェも抱きしめる力を強くした。

「私、いま良かつたって凄く思つてる。興味本位で覚えた魔術が私たちを救える力で、本当に良かつたと思つてる。もしもお母さんが死んじゃつたら、それが一番怖い事だつたの」

「ほんとう、ばかよ。貴女は」

「馬鹿でもいいよ。お母さんと一緒にいれるなら」

「……全く、どっちが母親か分かつたもんじゃないわねつ」

そう言つとクレアは微笑んだ。顔にアザは残るが、綺麗な微笑みだつた。それを見たルーチェの中に、力が湧くのを感じる。

「母さんは母さんでしょ。……さあつ、いかないとー。お話はここまでつ！ 先ずは裏口から出て、人気のない方に逃げよつ。あい

「分かつたわ。でも、村の人は大丈夫かしら。仲間がいるんじや」

落ち着くと、周りの状況が見えるようになる。外からは何時もと違つ音が聞こえていた。それは悲鳴や、争いの音だ。

ルーチェは頭を横に振った。

「冷たいようだけど、今は私たちのことで精一杯だよ。……急ごう

「……ええ。ごめんなさい」

ルーチェとクレアは立ち上がり、裏口から抜け出し森の中へと入り込んだ。正規の、獣道ですらない所から足を踏み入れた為に足場は最悪だったが、小走りで進んだ。

途中、火靈を使って明りをつけるべきかと悩んだが、クレアの意見で取りやめた。折角隠れ進んでいるのに、自分から目立つ必要はない。今夜は三日月で、月明りも強いとはいえないのだから。

二人は走った。夜の森は複雑で、怖い所だ。まるで世界に一人だけが取り残されて、魔物から逃げ惑っているようだ。そう思った。その通りだった。

ひゅんつ、と、嫌な音が聞こえた。それと同時にクレアが地面に倒れこむ。ルーチェは慌ててクレアに駆け寄った。

「何、何がっ。母さん、母さん！」

ルーチェはクレアを揺すぶつた。何度か揺すぶつてようやく気づく。矢だ。矢がクレアの背中に突き刺さっている。深くまで刺さっているようだ。幸いにも意識はあるようだが、その所為でクレアは

痛みに顔を歪めていた。

ひゅん。もう一度矢が飛んできた。「ああっ！」ルーチェの左肩に矢が刺さった。

痛い。痛くて泣きそうだ。殴られた時も相当に痛かつたが、この痛みはそんな物じやない。それに何より。

（二）れじやあ集中が、できない（）

大問題だった。敵が来ている筈なのに、反撃の手段が封じられた。ルーチェは自分に刺さった矢を引き抜こうと試みる。だが、無理だ。抜こうと力を入れると激痛が走る。自分じや抜けそうにない。そうして痛みと戦つているルーチェの前に、森の暗がりから男が姿を現した。

「逃げてんじやねえよ。小さな魔術師さんよお」

まさに山賊といった風貌をした巨体ででっぷりとした髭面の男は、そう言うと一人に近づき、わざとルーチェの左肩を蹴った。衝撃で矢が折れたが、先端はより深く肩に突き刺さった。

「ああああああっ！」

悲鳴が漏れた。肩に斧をショットした山賊男は、ルーチェの苦しむ姿を見て笑っている。

「つたぐ、こんな辺鄙な村に魔術師がいるなんて思わなかつたぜ。しかも手下が一人も返り討ちにあつちまうなんて、笑えねえ」

やれやれといった風に両手を上向きで揺らして、山賊男は「なあ

「そう思つだらう。」と後方へと声を掛けた。その声と共に、何人の男たちがそろそろと姿を見せる。

「……うわ！」

「残念ながら、嘘じやねえんだよなあ。お嬢ちゃん」

山賊男はねつたりとした笑みを見せる。ルーチュの絶望を的確に感じ取つたのだろう。嫌な笑みだつた。そして言つ。

「お母さんを助けたくないかい？」

やう言つと、山賊男は「自分にとつて」素晴らしい提案を長々と語りだした。だが、ようやくすればそれは簡単な話だつた。

こいつはルーチュに、大人しく奴隸となれ、といつているのだから。

この物騒な世界で、魔術師は有用だ。それも年若い少女となれば、尚更の話いい値段がつく。魔術師の女奴隸なんて希少品なのだ。だから、母親を助けたければ、大人しくしていろ。それが山賊男の提案だつた。

全く、ふざけた提案だ。

「そんなこと言つていいのかな。私、途中で反逆するかもしれないわ」

「安心しな。世の中には『調教』を専門にした人間が存在するんだよ。半年もあればお嬢ちゃんは有能な女奴隸に早変わりさ。どうだ、いい話だらう」

山賊男の手下達が「さやははは」と下品な笑い声を上げた。ほんと、最悪だ。最悪すぎて泣けてくる。でも。

（でも、もう私には、これしかないのかもしない）

ルーチェは歯をくいしばった。屈辱だ。だが、ルーチェの命とクレアの安全を保障するには、もうそれしかないのかもしない。結局は、母親の未来も明るくないに違いない。けれど、それをこつちが理解していると判断した上で、この男はそんな提案をしてきてる。見た目より頭は回るのかも知れない。最悪だつた。

「一応言つとくわ。代わりに母さんを解放しなさい」

「あんたが大人しく調教を受けた後ならな

「……覚えておきなさい、例えどれだけ自我が壊れたって、母さんに手を出したその瞬間、あんた達の命はないわよ」

「覚えておくさ。 ああ。お前ら、首輪をつける」

後ろで控えていた山賊男の手下が、鉄製の首輪を持ってルーチェに近づいてくる。ルーチェは諦めて目を瞑つた。

茂みを搔き分ける音が、まるで死の宣告のように聞こえる。たゞ手下達も、ルーチェの存在に怯えているのかも知れない。その歩みは遅い。いや、もしかしたら此方を怯えさせる為の演出なのかもしない。どうでもいい事だ。

そうしてルーチェが絶望を受け入れようとしたその瞬間。

「私の娘に触れるなあああつ……」

「ぐああっ！」

クレアが己に突き刺さっていた矢を武器に、手下の男に襲いかかつた。

「……させないわ」

鬼気迫る表情のクレアが振りかざした矢は、深々と手下の首に突き刺さる。クレアはそのまま手下のベルトに吊り下げられていた短刀を奪い、更に手下に突き刺した。

「誰が、あんた達にくれてやるものですかっ！」

クレアが、吼えた。

自身の痛みなど感じていないかのように、クレアは走り出す。そして、山賊男に飛び掛った。

「あああああああああっ！……」

「ちう、馬鹿が」

肉を裂く嫌な音がして、血が飛び散った。「……嘘」とルーチェは呟く。身体から力が抜けて、膝から地面に崩れ落ちた。

クレアが、切られた。

裂ぱくの勢いを持つて繰り出された短刀には、確かに迫力があった。だが、山賊男にとつてはそれだけだつたのだろう。返り討ちにされた。

腹と腕が裂かれていて、出血量は相当な物だ。素人目にも、もうクレアが助からないといけない事は明白だった。

「……嘘だ」

「くそつ、お前らつ！ わたたとここつをふんじばれ！ いや、もういい殺せ！」

山賊男はその時、多分、正しい判断を下していた。クレアを失ったルーチェは、首輪を失つたただの獣。彼らにとつてもう、害にしかならない。「早急に始末しなければならない」という、その判断は恐らく間違つていらない。

だが惜しむらくは、

「嘘だ」

その獣の存在が、彼ら程度では賄えない程に巨大だつたという事だ。

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だあつ！！！」

ルーチェが叫んだ。絶叫だ。耳が裂けるのではないかという声量の、聞く者の胸を突き刺すような叫び。

ルーチェの身に纏う空気が、変わった。

風がルーチェを中心として逆巻いた。森の暗闇を照らす為の、夜盗達の持つ松明の火がルーチェの下へと奪われていく。暗闇の中で、ルーチェの周りだけが炎で照らされていた。炎は収束しつつ巨大化し、その層を厚くしながらうねりを上げてルーチェの身体を包み込む。まるで繭のようだつた。幾重にも圧縮されて育まれた超高温の炎の繭。そんなものに包まれていながら、ルーチェは平然と身体を保ち、虚ろな視線を月に向けていた。

もしこの場に他の魔術師がいたのなら、驚いて言葉を失くしたに違いない。この現象は異常な量の魔力を与えられ、呼び寄せられた

火靈が原因の「暴走」だ。だが、本来なら魔術師本人すら焼き死くす筈の火靈は、まるで慈しむ様に炎の中でルーチェの身体を守つていた。普通ならありえない事だった。

夜盗の誰かが放つた矢が、炎の繭に向かう。無駄だ。矢は繭に触れた瞬間、瞬時に消滅した。

「嘘だろ、おい……」

誰かが呆然と呟く。無理もない話だった。無様な悲鳴を上げて、何人の夜盗が逃げ出そうとした。無駄だった。逃げ出した夜盗たちは、一人残らず炎の繭から延びた触手で消失した。

逃げ出さない者、腰が抜けで逃げ出せない者は、その後に触手に抱かれて消失した。

山賊男も後悔していただれり。逃げ出そうとした。けれどもそれは無駄な事だ。

「後に悔いのから、後悔」なのだから。

彼もやがて、塵一つ残さず消滅した。

世界が炎に包まれていく。何もかも飲み込んで、消し去っていく。

その日、森の一角が忽然と空き地になつた。

そこには氣絶する少女以外に、何一つ存在しなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9987w/>

---

神造世界のルーチェ

2011年11月11日19時26分発行